

問Ⅰ

次の文章を読み、下の問いに答えなさい。

本書では、サンタクロース、イースターバニー、歯の妖精など、実体のない存在の訪問を扱っています。しかし、報告された体験は、訪問方法や結果が欠如しているという意味で実体がないというわけではありません。第1に、サンタクロース、イースターバニー、歯の妖精は、子どもたちによる文化への積極的な参加を理解する上で重要なものです。子どもたちと会話をしたり、彼らを観察したりすると、文化に属する幼い彼らがこうした儀式的力学に対して影響力を持ち、貢献していることがわかります。子どもたちは単に大人たちによって受動的に社会化されているわけではありません。特にイースターの場合、子どもは積極的に文化的実践を形成しています。子どもは儀式の実践の中で文化的権力の地位を占めており、大人から受動的に文化変容を受けているわけではないのです。（途中略）

子どもたちによる象徴的な影響の広く知れ渡っている例として、想像的活動が挙げられます。幼い子どもと想像的体験との結びつきは非常に基本的なものであるため、私たちの文化に属する人々の多くは、ファンタジーと想像的体験の能力とを発達・進展において（逆方向に）密接に結びついたものとして見なしています。言い換えれば、想像的活動は子どもを間違いなく「成長させる」何かなのです。「空想の友達(imaginary companion)」と接点を持つ子どもは正常であると考えられています。それは「本質的に魅力的な」行動に子どもに従事させ、環境を豊かにし、生活に「前向きな役割」を提供するものと見なされています。しかし、社会規範に基づけば、子どもたちは年齢を重ねるにしたがって、この想像的活動を放棄しなければなりません。大人が架空のウサギと接点を持てば、通常は少なくとも精神疾患の疑いを持たれてしまいます（『ハーヴェイ』の劇で脚色されているように）。

おそらく、アメリカの大人たちは想像的活動に従事する資格を（伝統的な宗教、文学やその他の芸術、夢、個人的な言論や思想を除いて）ほとんど持たないため、過ぎ去った時代の「素晴らしさ」と再び出会うために、子どもを通じた代理的な体験に依存しようとします。母親たちはそうすることで目に見えない豊かさを見出すのです。そして、クリスマスは（ディズニーランドの巡礼や歯の妖精の訪問などもそうですが）、そのような豊かさを得る理想的な機会です。サンタクロースは、子どもたちに理想的な贈り物を提供し、大人には驚異や休息の体験を（本質的に、代理的に）提供するといった「積荷信仰(カーゴ・カルト)」を表しています。テイラー夫人へのインタビューからの抜粋には、こうした感情がよく表されています。

子どもたちはとても興奮していて、彼らにとってすべてが魔法のようでした。……

クリスマス、その興奮、子どもたちはまるで生き返ったかのようでした。……

実際のところ、世界をありのままに見ていないとも言えるのですけどね(笑いながら)。子どもたちは素朴です。私は彼らを見ると、魔法とか、そんなことを思い描きます。ええ、彼らは仕事という現実や普段通りの生活という現実と向き合う必要がないのです、だから興奮したままでいられるのだと思います。（途中略）

「これは遊びである(This is play)」という理解によって相互作用が組み立てられるかどうか、そこに含まれる内容を空想的現実とするのか、客観的現実とするのか、あるいは両方を同時に併せ持つものとするのかという心理的な構築に影響を与えるのです。遊びには、語り手から聞かされる「これは本当の話です。そういうことがあったかもしれません」という言明に必然的に伴う、ある種のパラドックスが含まれます。物語の本質的な真実が確認され、同時に文字通りの現実も手に入れられるのです。

ある見方では、妖精のような存在を指し示すために対象(object)という言葉を使用することは、適切ではありません。客観的現実(objective reality)とは、それを経験している人の外部にある現実を意味します。もしも子どもたちが崇拝する存在をまったく対象であるとするのであれば、それは別の意味での対象、すなわち、客観的であると同時に主観的でもある移行対象なのだとと言えるでしょう。

D・W・ウィニコットは、(漫画「ピーナッツ」に出てくる)チャーリー・ブラウンの友人であるライナスが、彼の「安心毛布(security blanket)」と名付けた愛着のある事物や対象を指し示すのに、移行対象という用語を使用しました。テディベア、ぬいぐるみの人形、その他お気に入りの所有物などもそれに該当します。移行対象は体験の中間領域に属しており、内的現実と外的生活の両方に帰属するものです。この移行空間は相互作用的で、非典型的で、操作可能で、変化に富んでいます。子どもは文化的シンボルを移行領域に組み込む際に、従うことも黙認することもなく、むしろ創造的にかかわりながら、そのシンボルを「異議申し立てをされることのない中間的な体験領域(neutral area of experience which will not be challenged)」へと組み込むのです。ウィニコットの説明によると、芸術と宗教は、この中間的な「休息の場所」に位置します。それは内なる(個人的な)体験と外なる(共有された)体験とを関連付ける緊張から、心地よい「安らぎ」を与えるものです。現実性についての主張は、子ども時代の想像力に富んだ比喩的な遊びから導き出されるこの移行空間の中では意味をなしません。しかし、文化に属する人たちがその移行領域の内容に「ほどよい重なり合い(a degree of overlapping)」を見出したならば、その体験は共有されるかもしれません。(途中略)

文化に属する各個人の移行空間または想像的体験は、「内的現実と外的現実とを分離させつつも、相互に関連させるという永続的な人間的作業に従事する個人のための休息の場所」を提供します。それにより、神話と儀式が可能になるのです。ある意味では、子どもたちは文化的なコンテンツに積極的に手を伸ばし、自分たちのものとして取り込むことのできる、自律的な文化の一員です。だからこそ、文化は活力と躍動感を持ち続けることができるのです。文化と子どもは相互的に構成されていくものなのです。

(シンディ・デル・クラーク(著)、富田 昌平(訳)「空想の翼と信じる力」
(ミネルヴァ書房 2024年)

Used with permission of University of Chicago Press, from *Flights of Fancy, Leaps of Faith: Children's Myths in Contemporary America*, Cindy Dell Clark, © 1995; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.)

問

筆者の意見を参考にしながら、子供がサンタクロースを信じることと、子供の精神的発達と文化とのかかわりについて、200～300字以内で述べなさい。

問Ⅱ

次の文章と表を読み、下の問い(問題Ⅱ-I、Ⅱ-II)について答えなさい。

真実への気づきは子どもに何をもちたすか？

歯の妖精ではなくサンタクロースに関するものですが、プレンティスたち (Anderson & Prentice, 1994) は 1990 年代に次のような調査を行っています。彼らはまず、夏のデイキャンプに参加した小学生の保護者 132 名に対して、「サンタクロースのことをもう信じていない子どもを集めています」と書かれた手紙を送り、その後の電話でのやりとりを通じて調査への協力を依頼しました。その結果、70 の家庭が調査への協力に同意し、最終的にすべての調査に参加できた 52 の家庭を分析対象としました。すでにサンタクロースを信じていないと考えられた子ども 52 名の年齢は 9 歳から 12 歳の範囲であり、平均年齢は 10 歳でした。

インタビューで子どもは次のようなことを尋ねられました。「サンタについてあなたが知っていることを教えてくれる?」「サンタは本当にいると思いますか、それともいないと思いますか?」「サンタが本当はいないことについて、あなたはどのようにして気づきましたか?」「そのことに気づいた時、あなたはどのように感じましたか?」「その時に感じた思いの強さはどの程度のものでしたか?」「その思いはどのくらい続きましたか?」「あなたはそれ以前にも『サンタはいないかも』と思ったことがありますか?」「真実に気づいた時、多くの子どもはどのように感じるだろうと思いますか?」「あなたが真実に気づいた後も親の前で『サンタは本当にいる』ふりをし続けましたか?」「サンタを信じるようにと親があなたに教えた理由は何だと思いますか?」「あなた自身ももしも親となった時、あなたは自分の子どもに対してサンタを信じるように教えますか?」

また、親を対象としたアンケートでは、子どもがサンタを信じるようにするために親が行った言語的または行動的な働きかけの内容と程度、サンタクロース神話に対する親の態度、そして、真実に気づいた時の子どもの反応と親自身の反応などについて尋ねました。

調査の結果、いくつかの興味深いことがわかりました。まず、子どもがサンタの真実に気づく年齢は主に 7, 8 歳頃であり、これは先行研究とほぼ同様でした。男女差もありません。親の予測もこれとほぼ一致していました。……(途中略)

実際、親によって最も多く報告された感情は「悲しみ」であり、サンタクロースの真実に気づくことは幼年期との別れとして象徴的に受け止められているようでした。何人かの親は祝祭から「魔法」が失われていくのを感じており、また何人かの親は子どもと楽しむ特別な儀式(サンタのためにミルクやクッキーを用意するなど)が終わりを告げたことに失望を感じていたということです。これらの親は子どももまた真実に気づくことで苦悩を経験するだろうと強調する傾向がありました。しかし、ふたを開けてみると、子どもは親が思っているよりもはるかに真実への気づきをポジティブに受け止めていることがプレンティスたちの結果からわかったのです。

さらに、調査の事前の段階では、サンタクロースを信じるよう親から言語的または行動的な働きかけを多く受けている子どもほど、その反動で、真実に気づいた時により多くのネガティブな感情

を経験しているのではないかと予想されていました。しかし、驚くべきことに結果はその逆で、親からの働きかけが多い子どもほど、むしろネガティブな感情の報告がより少なかったのです。プレントイスたちはこの結果について、サンタクロース神話を子供に奨励している親はその話題により敏感で、よりていねいに取り組んでいるため、子どものささいな変化にも気づき、うまく対処できていたのではないかと述べています。確かに、そうしたことは言えそうです。加えて、サンタクロース神話を積極的に奨励している家庭では、クリスマス行事そのものがより楽しく演出され、それは真実に気づいた時の悲しみや怒りや失望を大きく上回ったのではないかと、ということがこの結果からは想像できます。

表1 子どもがサンタクロースの真実に気づいた時の子どもと親の感情報告の出現率

子どもの感情		親の感情	
驚いた (Surprised)	71%	悲しい (Sad)	40%
嬉しい (Happy)	62%	特になし (None)	32%
いい気持ち (Good)	58%	安心した (Relieved)	26%
悪い気持ち (Bad)	50%	失望した (Disappointed)	24%
悲しい (Sad)	48%	不安に感じた (Uneasy)	10%
失望した (Disappointed)	48%	嬉しい (Happy or Glad)	6%
騙された (Tricked)	48%	やましい気持ち (Guilty)	4%
安心した (Relieved)	46%	心配だ (Worried)	4%
混乱した (Confused)	42%	腹が立った (Angry)	0%
腹が立った (Angry)	35%		
気が動転した (Upset)	33%		
申し訳ない気持ち (Sorry)	29%		
傷ついた (Hurt)	13%		

注：子どもと親とではデータ取得の方法が異なっている点に注意が必要である。

出所：Anderson & Prentice (1994) をもとに筆者作成。

表2 サンタクロースの真実をめぐる質問に対する子どもの回答

質問	回答	%
サンタの真実にどのようにして気づいたか？	自分の力で	54
	親に言われて	33
	上記2つの組み合わせで	13
それ以前から「サンタはいないかも」と思っていたか？	思っていた	79
	思わなかった	21
親はなぜ子どもにサンタを信じるように教えると思うか？	その方がより楽しめるから	50
	それが伝統だから	21
	子どもに善い行いをしてほしいから	8
	その他	21
自分が親になった時に子どもにサンタを教えると思うか？	教えると思う	71
	教えると思わない	13
	今はわからない	16

出所：表1と同じ。

(富田 昌平「子どもと旅するファンタジーの世界 発達心理学の視点から」
 (「空想の翼と信じる力」所収))

問Ⅱ-I

表 1、表 2 に記載されている、サンタクロースの真実に関する親や子どもの感情報告や質問に対する子供の回答の結果をみて、理解したことを 200～250 字以内で述べなさい。

問Ⅱ-II

問Ⅰ、問Ⅱの全体を通して発達心理学の観点を理解した上で、サンタクロースのことを「信じること、信じなくなること」は子どもにとってどのような意味をもつかについて、【文化、社会化、中間領域】のキーワードを使用し、400～500 字以内であなたの考えを答えなさい。